

気づいたことに、気づかない

Unawares Awareness.

林 良平*¹ 岡松 道雄*¹ 毛利 洋子*¹
Ryohei HAYASHI Michio OKAMATSU Yoko MOURI

*¹国立高専機構鹿児島高専

National Institute of Technology, Kagoshima College

This paper aims to introduce *Tracology* (trace+ology) as a new definition of understanding people's behaviors. The traces are left by people's behaviors.

It is possible to notice what people did by observing their traces, through which their next behaviors can be changed.

We show a few examples of the behaviors which have changed because of the traces and explain how the *Tracological* approach changes people's behaviors.

1. はじめに

本稿では、自分の行動よりも先立って行われた行動や、その行動によってできた痕跡によって、気づかないうちに行動が誘導されている事例を取り上げる。これらの事例を取り上げる目的は、人の行動選択と痕跡の関係が深いことを強調するためである。そして、痕跡が人の行動選択にとっては「意味のある」ものである一方、その人の行動目的にとっては「意味のない」ものであることを例示したいからである。

2. 痕跡に意味づけをする仕組み

2.1 両すくみ

人の行動選択について考えるにあたり、はじめに原始の状況を仮定する。原始の状況とは、状況*¹から一切の意味を取り出すことができず、また意味がないことも意味をなさない場合のことである。人が原始の状況に直面すると、選択を決定する根拠がないため、無作為な行動*²を選択せざるを得ない。

安富はコミュニケーションにおける原始の状況からの脱出を N. Luhmann の「両すくみ (double contingency) 概念を用いて説明している*³。任意の行動が選択された後は、その行動が意味のある状況となり、すでに原始の状況ではなくなる。

連絡先: 林 良平, 国立高専機構鹿児島高専, 鹿児島県霧島市隼人町真孝 1460-1, 0995-42-9000, hayashi@kagoshima-ct.ac.jp

*¹ 人や物をとりまき、それらに影響を及ぼす条件のこと。*² 行動しないという行動を含む。*³ 「前提となる共通のメディアを全く持たずに二人の人間が出会ったとすると、両者は動きがとれなくなる。」

「場が全く共有されていないので、下手に動く相手はどういう解釈を下すかわからない。とりえずニヤニヤしたら、相手はそれを侮蔑の信号と見て殴りかかってくる可能性がある」とすると、表情を浮かべることすらできなくなってしまう。そうすると、二人はなにをどうしてよいかわからず、双方にらみあいが続いて動けなくなってしまう。このような状態を「両すくみ」とでも呼ぶことにしよう。

両すくみを抜け出すには、どちらかが危険を覚悟でなんらかの動きを見せねばならない。そうしてはじめてコミュニケーションは可能となる。幸いなことに人間は完全にビタッと止まっていることができない。必然的にモジモジするなりニヤニヤするなり、最低でも息を吸い込んだり吐いたり、何らかの行為をしてしまう。」

2.2 社会的シグニファイア

つぎに、自分には過去の知識や経験を利用できないが、状況からは意味を取り出せる場合を考える。D. Norman は「人の活動には、その痕跡を残すという副次的作用がある。(中略)この副次的作用は重要な社会的サインである。」と述べたうえで、この社会的サインを「社会的シグニファイア」(Social Signifiers)と呼んだ*⁴。

社会的シグニファイアは、他の人の行動の結果から生じることが、自分の行動選択の根拠となり得る。

2.3 追従

さらに、人は過去の知識や経験を利用できない状況では、他の人の行動を真似すると仮定しよう。そう仮定してもよいと考えられる事例もある。例えば、著者が大講義室で学生の出席をとった際の出来事である。「出席者は名簿にしるしをつけるように」と指示したところ、最初にしるしをつけた学生が「○」を記入するとその後の学生も追従して「○」をつけた。しかし最初にしるしをつけた学生が「√」を記入するとその後の学生も追従して「√」をつけた。しるしは「×」でも「/」でもよいが、他の人の行動を真似したのである。特定の記号を選択すべき価値観も物理的制限も、明示的な社会的シグニファイアもない場合は人は他の人の行動を真似するようである。

また、社会的シグニファイアが混乱している場合も人は他の人の行動を真似するようである。エスカレーター利用者の並び方の同調実験*⁵では、人は暗黙の規範に拘束されると同時に、その場の集団の同調圧力の影響も受けながら行動していることが示唆されている(釘原, 2011)。

*⁴ 「電車に乗るために急いでいるとしよう。駅のプラットフォームに駆け込む。乗り遅れたのか、それとも単にまだ来ていないのか、どうやって判断するだろうか。そこにプラットフォームの状態がシグニファイアとして働く。」

(中略) 待っている人の群れは電車がまだ着いていないことの強い証拠と言えるだろう。一方、無人のプラットフォームは電車がもう出てしまったことを示唆している。」

*⁵ 東京と大阪ではエスカレーターの並び方が反対である。東京では左に並び右を空けるが、大阪では右に並び左を空ける。そこで阿形らは、大阪の規範が比較的強い大阪モブールの門真駅と、規範が弱い大阪空港駅でサクラを使った野外実験を行った(釘原より要約)。

2.4 事後的意味づけ

他の人の行動が全くの無作為であったり、根拠が薄弱なものであったとしても、自分にとっては行動選択の根拠となり得る。それは、他の人が行動することで環境に痕跡が残り、その痕跡から自分は意味を取り出すからである。痕跡から意味を取り出す行為は、他の人の行動に事後的意味づけをしていることに他ならない。

これまでの例を振り返ってみよう。両すくみの状況から相手が少しでも動けば、その行為は相手の意図とは別に自分の解釈を生じさせる。プラットフォームにだれもいないことは、必ずしも電車がもう出てしまったことだけを示唆しているとは限らないが、電車がもう出てしまったに違いないとする自分の解釈を生じさせる。名簿のしるしは、最初の学生にとって無根拠な記号であったとしても、次の学生以降の規範として解釈される。エスカレーターの並び方も同様である。

3. 痕跡の意味と行動の目的

痕跡から取り出される意味は、行動の目的とは無関係であってもよい。たとえば名簿のしるしは、次の学生に規範を示しているが、次の学生の目的は出席していることを証明することである。記号が「○」であるか「√」であるかはこの文脈では出席を証明する媒介としての役割しかもたない。しかし、行動の目的とは無関係である痕跡であってもなお、実際は社会的シグニファイアや追従というプロセスを通じて行動選択を変化させている。

痕跡が人の行動選択にとっては「意味のある」ものである一方、その人の行動目的にとっては「意味のない」ものであることが、痕跡の意味に「気づいた」にもかかわらず、痕跡に行動を変化させられたことに「気づかない」現象を招く。

4. おわりに

本稿では、人の行動選択にあたってどのように痕跡が生じ、痕跡に意味づけをしていくかを例示することで、人間行動と痕跡の関係を説明してきた。痕跡は行動選択の前提となる指針がない場合に、行動選択の根拠となり得る。そうであるならば、矛盾した価値観が混在する状況や、はじめて訪れた場所など、行動選択の指針がない状況では痕跡に行動選択が大きく影響されるだろうか。または逆に、過去の知識や経験が大いに役立ち、かつ明確な行動目的がある状況では、痕跡は行動選択に影響を与えないだろうか。これら痕跡と行動選択の関係については今後実験を通じて明らかにされる必要がある。

参考文献

- [福井 02] 福井 康太: **法理論のルーマン**, 勁草書房 (2002).
- [Gibson 86] Gibson, J. J.: *The Ecological Approach To Visual Perception*, Psychology Press; New Ed edition, (1986) (邦訳: 生態学的視覚論—ヒトの知覚世界を探る, 古崎敬 訳, サイエンス社, (1986)).
- [小松 13] 小松研治・小郷直言・林良平, 痕跡学序説—痕跡を読み, 痕跡に語らせる—, **富山大学芸術文化学部紀要**, 第7巻, pp.70-85, 2013.
- [釘原 11] 釘原 直樹: **グループ・ダイナミクス—集団と群集の心理学**, 有斐閣 (2011).

[Norman 10] Norman, D. A.: *Living with Complexity*, The MIT Press (2010) (邦訳: **複雑さと共に暮らす—デザインの挑戦**, 伊賀 聡一郎・岡本 明・安村 通晃 訳, 新曜社, (2011)).

[大庭 89] 大庭 健: **他者とは誰のことか**, 勁草書房 (1989).

[安富 06] 安富 歩: **フォーラム 共通知をひらく 複雑さを生きる**, 岩波書店 (2006).